

展示解説

瓦はやきもので作られた屋根材の一つです。広辞苑によると、瓦は「粘土を一定の形に固めて焼いたもの。主に屋根を葺のに用い、また、^{とこじき}床敷とする」とあり、^{せん}広くは^{しきがわら}埴や敷瓦も含む用語です。屋根の素材は瓦の他にも草や樹皮、板、石、金属など様々なものが挙げられます。しかし、日本建築史上、瓦は特殊な屋根材でした。とりわけ近代以前の^{かわらぶき}瓦葺屋根は当時の宗教や政治権力の中心的施設である^{じいん}寺院や^{じょうかく}城郭などを主とする特定の建物に使用されました。こうした場所で使用される軒先瓦（軒丸瓦と軒平瓦）や鬼瓦は実用性ととも装飾性に富んだ屋根材でもありました。そのため、江戸時代後期から明治時代になると、^{はいじ}廃寺や^{こうずか}城郭の瓦片を蒐集した好事家の記録も認められます。戦後には、多くの寺院や城郭跡などが発掘調査され、愛知県内でも古代～近世における瓦の様相が明らかになっていきます。

日本で最初に瓦が用いられたのは寺院建築と考えられています。588年に朝鮮半島の^{くだら}百濟から寺院建築の技術とともに瓦の製作技術がもたらされ、日本最古の寺院である^{あすかであ}飛鳥寺が建立されたと伝わっています。その後、7世紀後半に^{おわり}尾張最古の寺院である^{おわりがんごうじあと}尾張元興寺跡が建立されました。

当時の寺院建立や瓦製作技術は専門的な技術を必要としたため、地方寺院は中央寺院や都城からその技術を断続的に入手していたと考えられます。それは畿内の寺院や都城と同^{きない}範を用いて作られた瓦や文様表現の共通する瓦が尾張地域の古代寺院でも見つかっているのが主な理由です。また、東海市トドメキ遺跡や知多市^{ほうかいじ}法海寺遺跡、美浜町^{かいどうだ}海道田遺跡で発見されている事例から、知多半島内にも瓦の製作技術が広まっていったと考えられます。

古代末期から中世初頭にあたる12世紀は、^{せつかん}摂関政治の^{しゅうえん}終焉と^{いんせい}院政、平氏や源氏を中心とする武家勢力が台頭する時代へと大きく変わった時期でもあります。瓦そのものは大きく変わることはありませんでしたが、古代を通じて軒丸瓦の文様意匠として採用されていた^{れんげもん}蓮華文は次第に減少していき、新たに^{ともえもん}巴文が主流となっていきました。巴文は近世以降の文様意匠の代表となりましたが、その理由は今も解明されていません。

知多半島の古窯や集落の発掘調査から、約40か所の遺跡で古代から中世の瓦が出土しています。そのうち、12世紀から13初頭に生産された瓦は主に県外へと供給されました。常滑窯の瓦は山茶碗や甕などの陶器とともに^{へいしやう}併焼されています。そのため、他地域の瓦と比較して^{こうじつ}硬質で、白い素地に^{しぜんゆう}自然釉のかかる美しいものが多くみられます。常滑窯で生産された瓦は京都の^と鳥羽^{きゆうひがしどの}離宮東殿や^{にんな}仁和寺、^{ほうこんごういん}法金剛院などに葺かれたことが発掘調査でわかっています。こうした背景には地方の^{こくし}国司を歴任した貴族や官人などが陶器生産に関わっていた事を示していると考えられます。

ほうかいじ 知多市法海寺遺跡

法海寺遺跡は伊勢湾に面した砂堆上に位置し、北側に南北約4キロメートルの広大な沖積低地を望む場所にあります。想定される寺域中心部は、現在では天台宗薬王山法海寺が所在します。

現在の法海寺の寺域内には塔心礎などの礎石が現存し、古代の瓦も採集でき、古くから古代寺院の存在が知られていました。1973年の法海寺福社会館建設と1991年の本堂改修工事にともない、知多市教育委員会が発掘調査をおこないました。その結果、多量の古瓦と古代から中世の土器類が出土しました。

軒丸瓦は素弁八弁蓮華文軒丸瓦や細弁十一弁蓮華文軒丸瓦など7つに分類することができます。軒平瓦は四重弧文軒平瓦や均整唐草文軒平瓦など4つに分類できます。そのうち均整唐草文軒平瓦は北名古屋
市弥勒寺廢寺跡、甚目寺町法性寺跡で出土した瓦と同範であることがわかりました。

かいどう だ 美浜町海道田遺跡

かいどう だ
海道田遺跡は北から南へ延びる丘陵の先端部に位置し、南に山王川を望む場所にあります。遺跡の中心は現在の^{おおなむち}大己貴神社境内で、その北側には^{おくだ}奥田小学校があります。

古くから瓦が採集できることが知られており、^{おくだはいじ}奥田廃寺としても知られています。今回の展示品は 1994 年の道路拡張工事に伴う発掘調査で、瓦とともに須恵器や灰釉陶器も発見されました。

出土した瓦は軒丸瓦と軒平瓦で、軒丸瓦はすべて^{れんげもん}蓮華文で、^{たんべん}単弁及び^{ふくべん}複弁、中央部の^{れんじ}蓮子の数などによって、6種類に細分することができます。軒平瓦は^{じゅうこもん}重弧文を中心に^{きんせいからくさもん}均整唐草文など3つに分類できます。

^{ほうかいじ}知多市法海寺遺跡と並ぶ知多半島の古代寺院として、その造営の背景なども注目されています。海道田遺跡から南東の約 880 メートルの字打越の丘陵付近では、^{ごうはん}同範の瓦が採集されており、付近に瓦窯があったと可能性も指摘されています。

東海市トドメキ遺跡

遺跡は^{てんぱく}天白川左岸の河口付近で、古代のあゆち瀧と伊勢湾に面した海岸平地の丘陵寄りに位置しています。遺跡の周辺は宅地化が進んでいます

1985年から1986年に県道名古屋半田線の道路工事にともなって、東海市教育委員会による発掘調査がおこなわれました。その結果、瓦や^{はじき}土師器、^{すえき}須恵器など古代寺院に関連する遺物が出土しました。

発掘調査では東西2メートル、南北4.4メートルの瓦集中地点を検出して、ほぼ全形が残る平瓦が58枚出土しました。他にも遺構が発見されていますが、古代寺院が存在したとする証拠はみつかりませんでした。

出土した瓦は軒丸瓦と軒平瓦が確認されています。軒丸瓦は2種類あり、^{じゅうけんもんえんさいべんじゅうろくべんれんげものきまる}重圈文縁細弁十六弁蓮華文軒丸瓦は稲沢市^{みやけはいじ}三宅廃寺、^{にしおおだかはいじ}名古屋市西大高廃寺で同範の瓦が確認されています。もう一つの^{たんべんはちべんれんげものきまるがわら}単弁八弁蓮華文軒丸瓦は尾張元興寺^{おわりがごうじ}に似ています。また、トドメキ遺跡に隣接する^{おかまえかわ}岡前川遺跡には^{おわりこくぶんじあと}尾張国分寺跡で出土した軒丸瓦と同範の瓦が採集されており、なんらかの関係があったと推測されます。

一方で平瓦はすべて^{おけま}桶巻き作りで、完形の個体は長さが38.7～42.5センチとややばらつきがあります。瓦の形状や凸面の調整などから5種類に分類できます。

やしろやまこよう 東海市社山古窯

やしろやま かぎやまち
社山古窯は東海市加木屋町にある窯跡で、市南部の加木屋小学校から南西へ約400メートルの地点にあります。窯跡は北に延びる丘陵先端の北向き斜面に構築されていました。この窯からみて北東へ約2キロメートルの地点には権現山古窯群ごんげんやまが、北東へ約2.5キロメートルの地点には大府市吉田古窯よしだがあり、いずれも社山古窯と同じ瓦が焼かれています。

社山古窯で出土したやきものは、山茶碗、小碗、小皿、皿、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦おにがわらが挙げられます。

社山古窯の特徴は山茶碗や小碗、小皿を中心としながらも、瓦類を同時に焼いた瓦陶兼業窯であったことです。遺物層からは瓦類が多く出土しており、積極的に瓦を生産していたことが想像できます。

社山古窯で作られた軒丸瓦と軒平瓦は、三巴文軒丸瓦と唐草文軒平瓦が京都府鳥羽東殿とばひがしの（1131～1150年建立）に、蓮華文軒丸瓦と宝相華文軒平瓦が京都府法金剛院ほうこんごういん（1130年建立）に、蓮華文軒丸瓦と宝相華文軒平瓦と杏葉文軒平瓦が名古屋市熱田区熱田神宮寺あつたじんぐうじ（1150～1175年頃建立）で使用されたことがわかっています。また、近年の発掘調査では太田川駅周辺の遺跡どうはんも同範（同じスタンプ）の瓦が出土し、伊勢湾を中心とした瓦の旅に注目されています。

じょうはくだ 常滑市上白田古窯

上白田古窯は常滑市北部の^{かなやま}金山地区にあり、県立常滑高校（旧常滑北高校）付近から西へ延びる丘陵の北向き斜面に構築されていました。本窯跡から東へ約700メートルの地点には、^{しみずやま}清水山古窯が所在しています。

この遺跡は、ほ場整備事業にともない、常滑市教育委員会と知多古文化研究会により発掘調査が実施されました。調査の結果、2基の窯体が約5メートルの間隔をあけて並列して築かれていました。

出土遺物は^{やまぢゃわんしょうわんかたくちしょうわんたまぶちわん たんけいこ ひろくちへい かめ}山茶碗、小碗、片口小碗、玉縁碗、短頸壺、^{の しがわら}広口瓶、甕、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦があります。

上白田1号窯は、山茶碗と小碗を主体にして生産しながら瓦類も併焼した^{がとうけんぎょうよう}瓦陶兼業窯です。窯の構造は^{たきぐちはば}焚口幅が広く、^{つうえんこう}通焰孔の高さが低い点が注目されています。また、小さな瓦片ですが、唐草文軒平瓦は京都^{にんなじ}仁和寺で出土したものと同範であることから、上白田古窯は1135～1150年頃に操業していたと考えられます。

かたないけ 知多市刀池古窯

知多市刀池古窯は、知多市南東部の^{ちたぼえんきよくとう}知多墓園（旭東公園）の西側に位置し、東西に延びる丘陵の東向き斜面に構築されていました。周辺にはたくさんの窯跡が存在しています。

発掘調査は1965・1966年に知多町教育委員会（現知多市教育委員会）、^{こくしかんだいがく}国士舘大学考古学教室によって実施され、3基の窯が発見されました。出土遺物は甕、^{たまぶちつぼ}広口壺、^{とびぐちつぼ}玉縁壺、鳶口壺、片口鉢、平瓦が出土しています。

平瓦は凹面に糸切り痕が、凸面にはタタキ痕と^{だいふくじ}「大福寺」の文字がみられます。この文字は施文具に彫り込まれたもので、反転した状態で押されています。発見された瓦はいずれも黄白色で、焼き締め弱いものが出土しています。出土した甕の押印には^{こうしもん}格子文以外に菊文と巴文の意匠をもつものがあり、瓦との関連も想像させます。

知多市^{だいこうじ}大興寺所蔵の^{かけぼとけ}懸仏には「^{だいふくじみしょうたいなりえいにん}大福寺御正躰也永仁四年十一月廿六日」の銘文があり、大福寺は大興寺の前身寺院と考えられていることから、「大福寺」銘のある瓦は供給先を特定することができる資料として注目されています。刀池古窯で出土した甕の形状から13世紀中頃に操業していたと考えられます。

国指定史跡

いらごとうだいじがようあと 伊良湖東大寺瓦窯跡

指定年月日 昭和42年11月11日

伊良湖東大寺瓦窯跡は、^{じしやう}治承4年（1180）、平氏の焼き打ちにより焼失した東大寺の再建にあたり、その瓦を焼いた窯です。

昭和41年に発掘調査がおこなわれ、斜面をトンネル状に掘りぬいた3基^{あな}の窯が発見されました。窯の全長は12メートル前後、最大幅は2.5メートルほどです。

出土遺物には、「東大寺大佛殿瓦」^{だいぶつでん}「大佛殿」^{だいぶつでん}「東」の刻まれた軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦があります。2号窯からは法華経と大日経を刻んだ瓦経片^{がきやう}、^{きやうづつがいようき}経筒外容器片も出土しました。瓦のほか壺や山茶碗・小皿・鉢・陶錘^{とうすい}などの日常品も焼かれています。

東大寺再建の年代から、12世紀末から13世紀初頭に窯の時期を特定することができ、古くから東海地方の中世陶器の時期の定点を与えた窯跡であるとともに、渥美半島の窯業と当時の社会との関係を示す重要な窯跡です。

（田原市教育委員会より）